

# 文化財 ニ ュ ー ス

## 第 2 号

発行 加古川市教育委員会  
編集 加古川市文化財審議委員会  
加古川市加古川町寺家町39  
TEL ② 0242 ② 3477

### 加古川バイパス建設工事に伴う 東神吉町砂部～西井ノ口地区

### 発掘調査第 1 次略報

近畿地方建設局が実施している加古川バイパス建設工事のうち、加古川市東神吉町砂部ならびに西井ノ口地区より埋蔵文化財包蔵地が発見され、近畿地方建設局と兵庫県教育委員会ならびに加古川市の三者契約により、昭和 42 年 1 月 5 日より 2 月 8 日にかけて発掘調査を実施し、このたび一応整理の段階を終ったので、ここに第 1 次略報を発行することになった。

今回の発掘は昭和 41 年 12 月 14、15 両日に亘るテスト掘の結果にもとずき、東より砂部南地区(A)西井ノ口地区(B)の 2ヶ所を計画的に掘りはじめた。また発掘中建設工事に伴う擁壁の基礎の掘り方及び横断地下道建設のための掘り方を観察中荒井地区(C)において遺構の存在が確認されこの一部を断面並びに試掘を行なった。以下各地区における遺構の状態を述べ問題点をあげて見たい。

#### A 地 区

砂部南地区に於ては道路敷の北端にそって巾 4 m のトレンチ 25 m、更に東へ巾 2 m のトレンチ 40 m を設定、トレンチ内を 5 m 毎に地区設定を行なって発掘調査を推進した。

土層は		4 層に分れていた。遺物は第 III 層中に包含され、それ以外の層には発見されなかった。土器は彌生式土器片で全体に磨滅しておりしかも小片であった。これらの土器片はわずかの凹凸を示す第 IV 層上面の凹部に認められた。
-----	--	--

この第 IV 層上面の凹凸については、人為的なものとは考へ難く自然的なものと考えられ、土器を包含する第 III 層も砂礫層であることから、加古川をその源とする氾乱により本地点に遺物が

運び込まれたと想定され本地点北方の砂部遺跡との関連から、その遺物が運ばれて来たものと考えられる。

## B 地区 (西井ノ口地区)

昨年の試掘の際、本地点において表土下-150cmの土層中より流水文の描かれた土器を含む多数の土器片を採集した。

今回は先づ東西20m巾2m、これに直交する南北10m巾2mの“L”字形のトレンチを設定して調査を推進した。

土層は	$\begin{array}{c} \text{W} \quad \text{W} \quad \text{W} \\ \text{耕 土 I} \\ \text{黄褐色粘土 II} \\ \text{灰褐色粘土 III} \\ \text{灰褐粘土 2 IV} \quad \text{V黄灰粘土} \\ \text{青灰粘土 VI} \end{array}$	6層に分れている。遺物出土はⅡ層以下に包含され、第Ⅱ及び第Ⅲ上面には須恵器及び彌生式土器片、第Ⅲ、第Ⅳ層中には彌生式土器を包含していた。
-----	---	--

遺構…ベースと考えられる青灰粘土層上の黄灰粘土より掘り込まれた溝状の落ち込みが確認された。この落ち込みは上面での観察により北東より南西方向に走っていることが判明し“L”字形トレンチ内ではその両末端を把えられず更に周囲280㎡を拡張調査した結果東側では更に北東に延長、現代の農業用水溝により斜方向に切断され、東側の末端を把えられなかった。西側ではこの溝状遺構は更に西に延長し、発掘区域内ではその末端を把えられなかった。

遺物…前述の溝状遺構に多くの土器が認められた。これらはすべて彌生式土器で完形に近いものも出土した。器形別に見ると

壺形土器…頸部、胴部(外張り)に数条の断面三角形をはりつけ突帯を有するもの。

頸部、胴部に数条の沈線をめぐらしたもの。

胴部にへら描きによる流水文をめぐらしたもの等である。

甕形土器…くの字形に外反する口縁、小さな底部に向って次第にすぼまる胴部を有するもの。

肩部に数条の沈線を有するもの。

すべて甕形土器にはススの付着が認められた。

以上の特徴を有する土器は畿内第1様式の後半期に想定されており、播磨地方では数少ない貴重なものと考えられる。

播磨彌生前期の文化については、大和と北九州の間にはさまれた地域で、常にこれらとの関

係を考察しなければならない。前述のへら描流水文土器は現在まで畿内を中心とし西限は尼崎附近までと考えられていた。ところが本地点で発見された事は播磨という地域性を考える上で重要な資料である。

### C 地区 (荒井地区)

Bの東方約100~200mの地点で鹿島建設の工事として道路の北側に巾約2mの溝を掘り、又市道横断地点に於ける地下道工事のため巾約10mの掘り方を行った。これらの掘り方の断面から次のような遺構を確認し、断面観察、一部掘削を含む調査を実施した。

先ず道路北側の断面観察では溝状遺構、袋状堅穴等が検出された。溝状遺構はB地区の北に1ヶ所巾約5m、深さ1m前後のもので横巾の広い緩斜面をもつ溝があった。またそれより東方100mの地点においても約30m程の間隔をおいて2本の溝が検出された。西側の溝は北西より南東方向に認められ断面V字形に掘り込まれていた。内部より彌生式前期土器が発見された。また東側の溝は北東より南西方向に検出されこれもV字形で、溝内より彌生式後期の土器が発見された。この時期の異なる2本の溝は今回の調査範囲内においてはその両末端を確認できなかった。

袋状堅穴については北側掘り方の両壁に5ヶ所発見された。この中東側の穴の内より数条の沈線をめぐらした壺形土器が発見された。

次に地下道建設のために道路に直交させて掘られた掘り方の断面観察では2m程の落差をもつ大きな落込み及びその北側に溝状遺構が検出された。前者の落込み内は埋土により大きく4層に分かれそのいずれもより彌生式土器片を出土している。これらは全て前期後半のもので北側の遺構と造成時期が同じと考えられる。これらは前記のように4層に分れた埋土の中から出土する関係から今後この地点の遺構を広く精査すれば、彌生式土器編年研究上重要なものとなる可能性を含んでいる。

以上A地区においては遺構の性格や遺物の存在理由等或程度正確に検出し得たが、B・C地区については遺構のほんの1小部分しか判明せず、遺物は当地域に於ける貴重な出土品が発見されている。

B・C地区における溝状遺構は彌生文化時代における人々の生活を探るうえに重要な問題をなげかけている。これらの遺構は今回の調査区域内で終止せず更に東西に延長していることは遺跡の広大さを予想する。

彌生時代に於ける溝状遺構は全国的に見て数も少ない。これは彌生時代前期の遺跡が多く低湿地における土器包含層であったり、貝塚であったりして直接の生活址である状態は少ないためである。この意味で本地区の溝状遺構は貴重なものといえる。

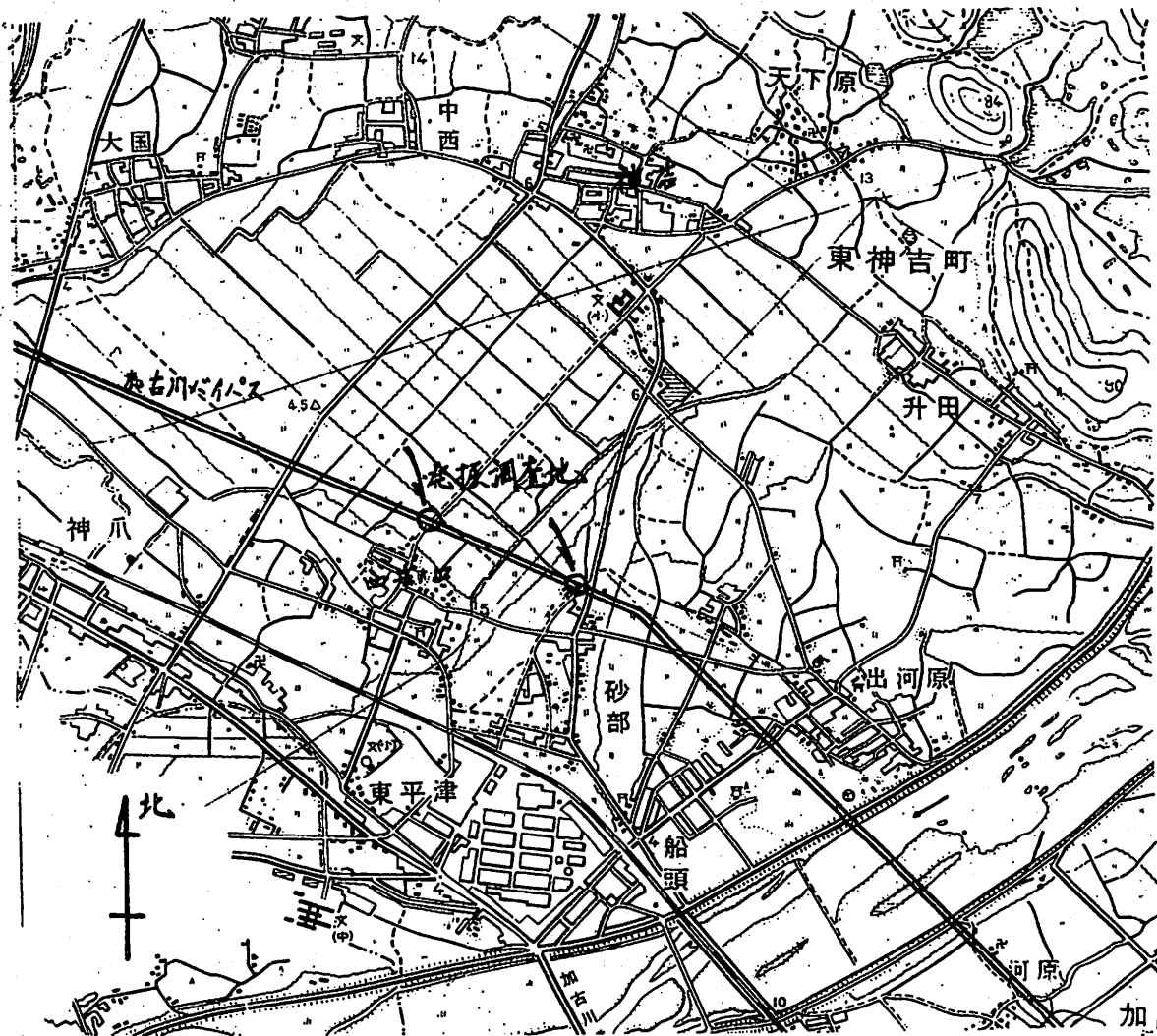
この第1次発掘調査には、下記の諸氏に現場の調査を担当していただいた。

- |           |       |
|-----------|-------|
| 兵庫県教育委員会  | 石野博信氏 |
|           | 松下勝氏  |
|           | 福井英治氏 |
| 加古川市教育委員会 | 中原敏定氏 |

なお、この略報は兵庫県教育委員会文化課において原稿作成されたものである。

### 加古川バイパス建設工事地内

### 埋蔵文化財発掘調査附近図



# 加古川市東神吉町

## 西井ノ口地区 彌生遺跡略図

